

第3回四極青雲会総会・懇親会 および記念講演会



平成25年4月27日
(土) トキハ会館6F
「さくらの間」で、四極青雲会第3回総会・記念講演会および懇親会が開催されました。

記念講演は大分大学学長の北野正剛先生による「体にやさしい手術への取り組み〜37年のPersonal History〜から」。

北野学長は、講演の冒頭、大分大学の現状と課題について次のように話されました。

大分大学は地域の「教育・研究・医療の知の拠点」であり、時代に即したグローバルな人材を養成し、地域社会に貢献しなければならぬ。当面の課題は、東九州メディカルバレー構想で、拠点化を目指す「医療機器産業」の発展を支援し、地域経済の波及に新しい芽だしを図ることであり、そのためには、

地域と連携しながら、研究開発、研究支援、セミナーの開催などに必要な人材の育成に取り組みたい。いずれにしても大学の未来は優れた教育プランと、それに沿った教育の実践にかかっている。

改革への意欲が感じられる講演の冒頭でした。

本題のご講演は、内視鏡による手術によって患者の負担を軽減し、なお且つ完璧な医療を目指してこられた、学長ご自身の外科医としての37年間の歩みでした。

ご承知のように学長は、外科医「世界の北野」であり、日本内視鏡外科学会理事長と世界内視鏡外科学会の第4代会長を兼任しておられます。限られた時間でしたが、青雲会の会員以外の聴講者も数多く見受けられ、先生の医療に対する熱い思いがひしひしと伝わるご講演でした。大学の運営、研究、教育、オペなど医療現場での実践とご多忙の中、記念講演をご快諾くださったことに改めてお礼申し上げます。

記念講演後の総会では、ご来賓の市原宏一経済学部長、下田憲雄前学部長、相良浩四極会会長よりご挨拶を賜り、平成24年度の活動報告・25年度の活動方針案、平成24年度決算報告・25



年度予算案の審議と、外国籍会員の名簿の整理・拡充に努めること、入会金・年会費の納入者を増やすこと、大学との連携を深め、大学院入学者の発掘や勧誘に協力していくという提案がなされ、いずれも満場一致で承認されました。

議事終了後、奥田憲昭先生から退官にあたってのお言葉を頂戴しました。先生は、厄介な病気「ネフローゼ」という爆弾を抱えながら、21年間無事に務めあげられたことがなにより喜ばしく、感慨無量とのことでした。奥田先生の今後のご健康とご活躍を心より祈念いたします。

記念写真の撮影を終えての懇親会では、会員を代表して水口

雅夫氏(7回生)が挨拶をされ、四極会名誉会長の田中康生様の乾杯のご発声で開宴しました。懇親会の進行は高橋幹雄氏中心の現役院生。懇親会のスタートは、譚夏慶さん・石川正史さん・荒巻真彦さん・井上聡さんの新院生4人の自己紹介や、女性初の博士号を取得した村上和子さんの博士論文の苦労話などでやや緊張気味でした。ひとしきり会が進むと、いたるところで会員同士の談笑の輪がひろがり、それぞれが楽しく有意義な時間を過ごされている様子でした。

出席者は、ご来賓の市原宏一経済学部長、下田憲雄前経済学部長、菅野隆先生、仲本大輔先生、奥田憲昭先生、相良浩四極会会長、田中康生名誉会長、穴井洋一大分支部長、四極青雲会会員52人の総勢60人。

最後に、新潟大学にご栄転のバハウ・サイモン・ピーター氏(12回生)の、いつもながらのウィットに富んだ締めめの挨拶で閉会しました。

当会の会員は、年齢職業・出身大学・学部・専門領域・国籍など実にさまざまです。四極青雲会はこれからですので、皆さん、応援よろしく願っています。